令 和 7 年 度　学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標	○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。

重点目標	分掌等	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況、来年度へ向けて	評定
1　生徒の自己実現に向けた資質・能力の育成（人づくり）	教務課	授業での継続的、段階的な取組みにより基礎学力・基礎的技能の向上を図る。	６月と１１月の公開授業週間ごとに教務課からテーマやスタイルを設定し、それに則った形で公開授業を実施してもらい、授業づくりの幅を広げるきっかけとしてもらうなど、「授業スタンダード」や授業参観、校内外の公開授業を活用し、各教員が授業改善に向けた不断の取組を行う。	学校評価アンケート　《公開授業週間への取組》 教員 ７年度：　91% ６年度：　83% ５年度：　92% 評価基準：Ａ＝90%以上 Ｂ＝75%以上 Ｃ＝75%未満 ※授業アンケート・学校評価アンケートの結果については、全回答における「よくあてはまる」「ややあてはまる」の回答割合を指す。以降同じ。	10月に行った公開授業週間では、新たな取組として、教科横断的な視点を意識した参観をしてもらうこととした。これによって、各教科における基礎的な知識・技能を土台とし、他教科や実生活との関連を踏まえた指導の在り方について検討する意識が教員間で共有された。公開授業に対する取り組み姿勢のアンケートでは、91%と向上も見られた。これらの取組を通して、授業改善を継続していくための視点が広がり、今後の授業改善について考える契機となった。	A
			①評価および授業改善の一環として、生徒が授業を振り返る場面を毎時間設定し、生徒の学びや生徒の変化を把握し、適正な評価へつなげる。 ②観点別評価の適正な運用を通じて、生徒の能力・資質向上につながるよう、授業者が働きかけを行う。	①授業アンケート　《まとめ・振り返りの設定》 教員 ７年度：94.1%　(39名中34名回答、回答率87.1%) ６年度：91.4%　(37名中36名回答、回答率97.3%) ５年度：90.0%　(38名中31名回答、回答率81.6%) 評価基準：Ａ＝90%以上 Ｂ＝75%以上 Ｃ＝75%未満 ②授業アンケート 《観点別評価を活用した生徒の資質向上への取組》 教員 ７年度：93.9%　(39名中34名回答、回答率87.1%) ６年度：77.1%　(37名中36名回答、回答率97.3%) ５年度：83.3%　(38名中31名回答、回答率81.6%) 評価基準：Ａ＝85%以上 Ｂ＝70%以上 Ｃ＝70%未満	「授業のまとめ・振り返りの設定」「アウトプットの時間を設定」の「あてはまる」の項目が増加している。一方で、今年度７月の調査と同じで、「ややあてはまる」についてそれぞれ数値が高く、これは教員間で実践の深まりに差がある可能性が示唆される。こうした状況を踏まえ、公開授業における相互の確認や共有を、授業全体ではなく「まとめ・振り返りの場面」に焦点化するなど、より具体的な視点で行っていくことが考えられる。 「観点別評価で生徒の資質向上に努めている」については、昨年度より数値は上昇しているものの、「ややあてはまる」が72.2%であり、観点別評価の実施や意識は広がっているものの、その成果を資質向上として明確に実感する段階には至っていない教員が多いと考えられる。	A
	生徒課	生徒が学校行事や部活動・委員会活動に積極的に参加し、社会人基礎力を身に付けることができるよう支援する。	多くの生徒が積極的に諸活動に参加できるよう、生徒会を中心に学校行事の企画・運営に努め、行事内容の充実を図るとともに、各種委員会と協力し、個々の生徒の活躍の場を広げ、可能性の伸長を図る。	○学校評価アンケート 《学校行事・生徒会活動・部活動に積極的に参加》 教員　保護者　生徒 ７年度：　95%　96%　90% ６年度：　100%　93%　96% ５年度：　100%　98%　92% 評価基準：Ａ＝95%以上 Ｂ＝85%以上 Ｃ＝85%未満	今年度も校内外全ての行事において、生徒会中心に多くの生徒たちの主体的で積極的な参加があり、個々の生徒の個性に応じた活躍が多く見られた。多くの生徒が、各行事・諸活動における周囲との関わりを通して、社会人として必要な基礎力を身に付けていっていると感じている。今後も必要な支援・指導を継続していきたい。	B

令 和 7 年 度　学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標	○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。

重点目標	分掌等	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況、来年度へ向けて	評定
1　生徒の自己実現に向けた資質・能力の育成（人づくり）	進路課	キャリア教育の充実を通して、主体的に考え行動できる能力の育成を図る。	①生徒の実態把握に努め、進路行事と進路総探を検討・実践し、生徒の進路意識の向上を目指す。また進路課だよりやＨＰを通じて、生徒や保護者への適切な進路情報の提供を行う。 ②各学期に進路希望調査を実施し、教員間で情報を共有すると共に、生徒一人ひとりの実態に即した進路指導に役立てる。 ③今未来手帳の活用を促し、進路講演会や日々の連絡での利用頻度を上げる。	①＜学校評価アンケート＞【キャリア教育の実践】 教員　保護者　生徒 ７年度：100%　96%　94% ６年度：100%　90%　92% ５年度：100%　98%　92% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ②進路希望調査にて未定生徒の推移で評価する。 評価基準 A：未定の生徒が20%未満 B：上記が20%以上40%未満 C：上記が40%以上 ③1学期末にアンケートをとって振り返りと働きかけを行い、2学期末の最終アンケートで評価する。 評価基準 A：手帳利用が「一週間に数回」以上の生徒が60%以上 B：上記の生徒が40%以上60%未満 C：Bに満たない場合	①学校評価アンケートでは、昨年度とほぼ横ばいの数値となっている。生徒の実態を把握し、進路行事や総探の内容を検討・実践することができたと共に、今年度より新たな行事を計画し実施した。行事ごとの生徒の自己評価も高かった。来年度もＰＤＲサイクルで現状を把握し、適切な進路行事の実施に努めたい。保護者向けの進路課だよりは定期的に発行できたが、生徒向けは発行回数が少なく、適切な進路情報の提供があまりできなかったことは反省点である。 ②進路希望調査結果 （３学期卒業学年除く） １学期　２学期　３学期 就職　57%　54%　57% 進学　23%　21%　18% 未定　20%　24%　25% 今後も未定の生徒について学年と連携し進路指導を継続して行っていきたい。 ③手帳利用アンケート結果（2学期末） ○手帳利用が「一週間に数回」以上の割合 …25.4%（毎日…9.8%1ヵ月…23.8% 数か月…20.5%） ○「活用できていない」割合…20.5% 前向きな意見がとても多い一方で習慣化するには時間がかかると感じている。今後も働きかけを行っていきたい。	B
	厚生課	健康で安全な生活を送る上で必要な知識を身に付けさせるとともに、防災・減災に努める力の育成を図る。	①研修や講演会などを計画的に実施し、健康で安全な生活を送る上で必要な知識を身に付けさせるとともに、防災・減災に努める力の育成を図る。 ②「ほけんだより」などの通信を通して検診の意義や治療の重要性を伝え、懇談や文書などの複数の場面で病院受診や治療を促す。	①学校評価アンケート《健康と安全ならびに防災・減災知識の向上》 教員　保護者　生徒 ７年度：100%　92%　94% ６年度：91%　92%　96% ５年度：97%　95%　93% 評価基準：A＝95%以上 B＝90%以上 C＝90%未満 ②《疾病治療率》 眼科　歯科 ７年度：36.4%　20.3% ６年度：44.1%　30.9% ５年度：32.2%　16.6% 評価基準：A＝50%以上 B＝40%以上 C＝40%未満	12月の抜き打ち避難訓練では、初期行動を取ることができなかった生徒が見られ、防災・減災知識の定着を効果的にできるような防災計画の立案が必要である。７月に健康診断結果を郵送し、10月にも通知票へ健康診断結果を同封したが、治療率は低いままであった。眼科の治療率が36.4%、歯科の治療率が20.3%であった。検診日当日に欠席する生徒が多かったこともあるが、調査書に視力の記載が必要なくなったことも要因と考えられる。そのため、卒業学年の眼科受診率・治療率が低下し、全体の受診率・治療率も低下したと考えられる。健康診断結果や受診を促す文書は配布したが、「なぜ治療を受けた方が良いのか」「治療を受けないとどうなるのか」など、治療の重要性を伝える文書を配布できていなかったため、今後は保護者・生徒への配布文書の記載内容の変化を検討したい。	B

令 和 7 年 度　学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標	○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。

重点目標	分掌等	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況、来年度へ向けて	評定
1　生徒の自己実現に向けた資質・能力の育成（人づくり）	年団	教育活動に目的意識と意欲を持って取り組む生徒の育成に努める。	１年団 年度初めの教室内のユニバーサルデザイン化をはじめとする環境整備を１年間継続して行う。1日の始まりで自己の身だしなみや身の周りの整理整頓を行った上で、手帳を活用したスケジュール等のソフト面での管理、クリアファイルを活用したハード面での書類管理等を継続して行う。また個人面談や保護者連絡を定期的に行い、生徒の困り感を吸い上げ、状況に応じた対策をその都度行う。そして高校に通う意味や学習の必要性など自分なりの答えを持てるよう１年間かけて指導を続ける。	＜学校評価アンケート＞ 【教室の環境整備】 教員　生徒 ７年度：　93%　74%（1年生） ６年度：　92%　83% ５年度：　97%　85% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ＜不登校者の割合＞ 【1年間で３０日以上欠席の人数】 ７年度1月時点：25%（13名／52名） 中3時点：49%（28名／57名） 評価基準：A=30%未満 B=40%未満 C=40%以上	年間を通して教室内が大きく乱れることなく過ごせていたように感じる。しかし、生徒の中には整理整頓が苦手な生徒もおり、机や個人ロッカーの整理には課題が残った。また学校評価アンケートでは1年生だけ他学年よりも１０％以上肯定的な意見が低く「ユニバーサルデザイン」という言葉自体の意味が理解できていない可能性が高く、評価、考察するのが難しい結果となった。長欠者の割合は中学時代から考えると約半数となり、高校生活から新たなスタートを切れた生徒が多い。また1学期や2学期当初は継続的に欠席が続いていた生徒に改善が見られたケースも複数存在し、1年生として高校生活に適応できた生徒がほとんどである。しかし、逆に終盤になるにつれて欠席が増えた生徒もおり、欠席理由やその背景にある原因に対して個々人に応じた対策をしていきたい。	B
			２年団 「５Ｓ」の実践を心がけ、基本的な生活習慣を確立する。「やる」の実践（すぐやる、必ずやる、最後までやる）を心がけ、落ち着いた環境の中で学習に取り組む習慣を身に付け、進路目標に向けての展望を開く。	○学校評価アンケート　《授業を大切に》 教員 保護者 生徒 ７年度：95%　99%　96% ６年度：94%　94%　93% ５年度：97%　95%　91% 評価基準：Ａ＝95%以上 Ｂ＝85%以上 Ｃ＝85%未満 課題提出状況　時間をかけてでも全員の提出 検定受験率　１００％　検定取得率　９０％ 年間皆勤２名以上、年間精勤３名以上、学期皆勤年間１０名以上 遅刻による反省文指導５名以内	検定受験率１００％とはならなかったが、合格率については目標レベルの達成はでき、次年度につながる成果となった。 特定の生徒に遅刻や欠席が集中しており、基本的な生活習慣にかかわることに関しては及第点に程遠いものであった。卒業学年としての強い意志と高い志を持たせるためにも学校生活の土台となる基本的な生活習慣の確立と徹底を実践しなければならない	B
			３，４年団 生徒が主体的かつ計画的に授業・行事・進路活動に取り組み、卒業後を見据えて自ら社会人基礎力を身につけ『逞しく』成長できるよう目標設定し、進路課と協力しながら年団全体で組織的な指導を行う。	①学校評価アンケート　《社会に適応する力》 保護者　生徒 ７年度３・４年団：　90%　92% ６年度２年団：　100%　90% ５年度１年団：　98%　96% 評価基準：Ａ＝90%以上 Ｂ＝85%以上 Ｃ＝85%未満 ②年団教員による評価（教員それぞれが、３・４年生の生徒全員を、４段階で評価する） 「生徒は主体的かつ計画的に教育活動に取り組み、卒業後を見据えた『逞しさ』を身につけようとしている」 評価基準：肯定的な評価の割合 Ａ＝70%以上 Ｂ＝50%以上	①学校評価アンケートでは、保護者89.7%、生徒92%、②年団教員による評価では、肯定的な評価が83.6%であった。特に４修３・４年では、４段階評価中「２」の生徒が減り、「３」の生徒が増えた。また、３修３年では、「３」から「４」になった生徒が増えた。担任の先生方の指導のおかげもあり、自分の身の回りのことなどを自分でできるようになったり、進路活動を通じて将来のことを自分事として考えられたりする生徒が増えてきたように感じる。肯定的に評価された生徒が増えたことにより、逆に否定的に評価された生徒は、学校生活を見ても目立つようになってきている。集団としては主体的に取り組む雰囲気ができてきているので、まずは自分から行動し、教員や周りの生徒の力を借りてでも完遂できるような精神力を育てていきたい。	A

令 和 7 年 度　学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標	○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。

重点目標	分掌等	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況、来年度へ向けて	評定
２　安心・安全で快適な学習環境（環境づくり）	生徒課	生徒の基本的生活習慣が定着し、規範意識を身につけ、集団の中で落ち着いた学校生活を送れるよう支援する。	生徒が、「1人1人の学ぶ権利を守る5箇条」に意識して授業に取り組むよう、全教員で統一して繰り返し指導を行い、５箇条に基づいた規律ある落ち着いた雰囲気の学習環境・生活環境を作る。	○学校評価アンケート　《授業を大切に》 教員 保護者 生徒 ７年度：95%　99%　96% ６年度：94%　94%　93% ５年度：97%　95%　91% 評価基準：Ａ＝95%以上 Ｂ＝85%以上 Ｃ＝85%未満 ○学校生活アンケート（生徒）≪雰囲気は落ち着いているか≫ ７年度：80%　６年度：75% 評価基準：A＝90%以上 B＝80%以上 C＝70%未満	多くの生徒が、ルールを守って授業を中心に落ち着いた学校生活が送れていた。しかしながら一部の生徒間でのトラブル、校内外での喫煙等、問題行動も少なからず見られた。日常の小さなことを見逃さず、細かな指導をおろそかにせず、生徒に根気強く向き合う姿勢が必要だと感じている。生徒に関わる全教職員間の情報共有、組織的対応・連携・指導を、継続して呼びかけていきたい。	B
	厚生課	ユニバーサルデザインに基づいた教室整備など、生徒が快適に学べる空間づくりを推進する。	①ユニバーサルデザインの周知徹底ならびに広報活動を行い、ユニバーサルデザインに立脚した教室整備に取り組み、学習しやすい環境づくりを行う。 ②年度当初から清掃や分別の徹底を教員から生徒に継続して訴えるとともに、美化委員作成のポスターなどの掲示を通して、日々生活している環境を整えようとする意識の向上を図る。	①学校評価アンケート《環境整備》 教員　生徒 ７年度：　93%　82% ６年度：　92%　83% ５年度：　97%　85% 評価基準：A＝90%以上 B＝85%以上 C＝85%未満 ②学校評価アンケート《環境美化意識》 教員　生徒 ７年度：　86%　90% ６年度：　83%　88% ５年度：　97%　90% 評価基準：A＝90%以上 B＝85%以上 C＝85%未満	多くの生徒が日頃から清掃活動などで校内美化に努めている。校外においても美化委員や生徒会執行部を中心に清掃ボランティアへの参加者が７０名を越え、自主的に地域・校内をきれいにしようと動く生徒が増えている。一方で、生徒の増加に伴い、清掃箇所に対して生徒が多くなり、清掃を監督する教員の目が行き届かなくなっている。中には時間より早く掃除を終えようとしてしまう生徒が見られる。清掃用具などの設備・備品面でも生徒や教員の状況に合わせて検討する必要があるため、年度末にかけて来年度以降の清掃分担などについて検討していきたい。	B

令 和 7 年 度　学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標	○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。

重点目標	分掌等	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況、来年度へ向けて	評定
2　安心・安全で快適な学習環境（環境づくり）	年団	生徒が教育活動の中で自己有用感を実感できるような仕掛けづくり及び個に応じた支援を行う。	１年団 体育祭・文化祭をはじめとする各種学校行事に参加する際に「参加」と「運営」の立場があることを事前指導で意識づけを行う。事前のマインドセットを「高校」という大きなくくりから、「学年」そして「行事」、「日々」と落とし込み、より具体的にスモールステップで指導する。また学校生活全般において他学年との縦のつながりを考えさせた上で、あいさつを始め、感謝や謝罪など基本的なコミュニケーションを積極的に取らせるよう定期的な集会・ＨＲ等で指導する。最終的にはわからない事を聞いたり、人に頼ったりすることの意義を知り、できるようにさせる。	＜学校評価アンケート＞ 【学校行事への参加】 教員　保護者　生徒 ７年度：95%　96%　89%（R7　1年生） ６年度：100%　93%　96% ５年度：100%　98%　92% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 【社会に適応する力】 教員　保護者　生徒 ７年度：100%　93%　83%(R7 1年生) ６年度：86%　94%　92% ５年度：97%　94%　89% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	学校行事では1年生ということもあり、上級生とともに「参加」することはできていたが、積極的に運営に携わったり、周囲に声をかけたりする場面は少なかったものの、2学期の文化祭や球技大会等ではクラスの連携や目標に向かって準備、努力することができており、クラスの連携が高まったように感じた。しかし「社会に適応する力」の項目ではクラスによる肯定的な意見の差もあり、学年全体の感覚をそろえたり、クラスごとの声掛けのレベル、そして生徒の自己有用感を集団として向上させていけるような取組が必要不可欠だと感じた。	B
			２年団 学校行事や部活動、ボランティア等の活動に積極的に参加できる環境を整え、生徒個々が主体的に取り組めるように促し、これらの活動を通してクラスや学年への所属意識や信頼関係を構築させ、自律的生活習慣を確立する等，健やかな成長の基礎形成を徹底する。 　また支援を必要とする生徒には寄り添い、自律的な学校生活を確立できるよう、健やかな成長を目指す。	○学校評価アンケート 《学校行事・生徒会活動・部活動に積極的に参加》 教員 保護者 生徒 ７年度：　95%　96%　90% ６年度：　100%　93%　96% ５年度：　100%　98%　92% 評価基準：Ａ＝95%以上 Ｂ＝85%以上 Ｃ＝85%未満 ボランティア参加率　　７０％以上 インターンシップ参加率７０％以上	ボランティアの参加者数は横ばいで割合としての伸びは残念ながらなかった。インターンシップの参加者は次年度の進路実現に向けて向上している。体育祭や文化祭などの行事には計画から実行まで生徒が主体的にかかわるように導くことで、協力して取り組めていた。 さらに来年度は最高学年としての自覚と誇りの下、学校生活への意欲を高めさせたい。	B
			３，４年団 保護者への連絡、生徒面談を綿密に行い、個々の適性理解に努めつつ、生徒が自ら教育活動に『重み』を持たせ、心身ともに健康で、粘り強く取り組むよう目標設定し、集団として学校のリーダーとなるよう指導する。	①学校評価アンケート　《保護者との連携》 保護者　生徒 ７年度３・４年団　93%　92% ６年度２年団：　97%　96% ５年度１年団：　100%　95% 評価基準：Ａ＝90%以上 Ｂ＝85%以上 Ｃ＝85%未満 ②年団教員による評価（教員それぞれが、３・４年生の生徒全員を、４段階で評価する） 「生徒は教育活動に『重み』を持ち、粘り強く取り組むことができる」 評価基準：肯定的な評価の割合 Ａ＝70%以上 Ｂ＝50%以上 Ｃ＝50%未満	①学校評価アンケートでは、保護者93.1%、生徒92%、②年団教員による評価では、肯定的な評価が76.9%であった。全体としては微増だが、肯定的な評価だった生徒が減り、否定的な評価が増えたクラスもある。進路活動を通して、「重み」を持って取り組むことの大切さを理解できたり、実際に取り組むことができたりした生徒が増えた。集団として、学校のリーダー的存在に育ってくれたと思う。一方で、綿密な担任面談にもかかわらず、体調面や心理面の改善が見られず、欠席や遅刻・早退が増え、成績不振の生徒が複数いる。その多くが、怠惰や生活リズムを崩してしまっている。また数名は、教育相談やSSWとつなげることができている。２学期の学校生活や行事に対して、粘り強く取り組めるよう、他の改善策を考えていく必要がある。	A

令 和 7 年 度　学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標	○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。

重点目標	分掌等	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況、来年度へ向けて	評定
3　社会に開かれた学校（仕組みづくり）	進路課	進路意識の向上のため、就労体験やアルバイトなど校外での活動を積極的に働きかけることをはじめ、卒業まで見通した進路指導を確立する。	①アルバイトやインターンシップ、オープンキャンパス参加の働きかけを行い、進路意識の向上へ効果的に機能するよう努める。 ②卒業学年には進路課面談、就職・進学に向けて全教員による面接指導を実施する。在校学年には、学期ごとに担任面談及び個々の生徒の実態に応じた進路指導を実践する。	①各学期で実施しているアルバイト調査、春夏それぞれのインターンシップ参加状況、オープンキャンパス参加状況を把握する。 評価基準 Ａ：参加生徒が50％以上 Ｂ：上記が30％以上50％未満 Ｃ：上記が30％未満 ②＜学校評価アンケート＞【担任による面接・進路面談】 教員　保護者　生徒 ７年度：100%　95%　90% ６年度：100%　94%　94% ５年度：100%　92%　92% 評価基準：Ａ=90％以上 Ｂ=85％以上 Ｃ=85％未満 ・卒業学年の進路決定者の推移で評価する(12月末時点) 評価基準 Ａ：90％以上 Ｂ：75％以上 Ｃ：75％未満 ・次年度卒業学年の進路未決定者数の推移で評価する Ａ：未定の生徒が20％未満 Ｂ：上記が20％以上40％未満の場合 Ｃ：上記が40％以上	今年度も各クラスにファイルを置いてアルバイト情報の提供を行った。また探している生徒がいれば個々に声かけも行い、採用へつなげた。今後も将来の進路を考える上でも社会性を身につける上でも有益であるので情報の提供を行っていきたい。インターンシップへの参加者数に関しても増えつつある現状である。企業もインターンシップの受け入れに積極的で、保護者も進路に向けて意識が高くなりつつあり、インターンシップに関して前向きに捉えている傾向があると感じる。今後も積極的な参加への働きかけを行っていきたい。オープンキャンパスへの参加状況は今年度より項目に盛り込んでいる。実際に行った生徒は少ないが、参加を考えている生徒は多くいる状況である。学校評価アンケートでは生徒の項目で若干数値を下げたが、担任・学年団等面談週間に限らず適宜声掛けを行っていると感じている。今後も継続的に働きかけを行っていきたい。 ○アルバイト実施調査結果 １学期　33.1％　２学期　49％　３学期　49% ○インターンシップ参加者 夏…25.4％　春(予定)…20% ○オープンキャンパス参加状況 １学期　14%　２学期　12% ○卒業学年の進路決定率　88%(36名決定/41名) ○次年度卒業学年の未決定者率 1学期…23%　2学期…16%　3学期…13%	B
	厚生課	関係機関との連携をはじめとした組織的な教育相談の体制を構築するとともに、個別支援計画の有機的・継続的な活用を図る。	①HRや集会での連絡、掲示物などによる情報提供を通して、配慮を要する生徒へのきめ細かな教育相談・特別支援を推進する。また、教職員と教育相談員、SC、SSW、外部機関と連携を取り、学校全体による相談支援・特別支援教育の体制を確立する。	①学校評価アンケート《特別支援》 教員　保護者　生徒 ７年度：　98%　91%　85% ６年度：　97%　90%　90% ５年度：100%　95%　82% 評価基準：A＝90%以上 B＝85%以上 C＝85%未満	不登校支援の案内などを配布・掲示し、学校外での生徒の居場所が確保できるよう努めている。月１回の頻度でSSWと情報共有の場を設けており、外部機関との連携を図っている。Hyper-QUを実施したものの、分析会は実施できなかった。外部アセスメントの活用については今後の課題である。教育相談やカウンセリングが必要だと思われる生徒を教育相談員やSCに繋げることができた一方で、特定の生徒のみになっていたり、生徒本人や保護者が必要性を感じていないことで繋げられなかったりもした。不登校の生徒や学校に来ても教室に入りづらい生徒もいるため、生徒・保護者・教員に対して適切な時期に適切な支援に繋げられるような体制づくりを模索したい。	B
	学校経営	地域との関りをはじめ、学校外での学びの充実を図るため外部との連携を進める。	①各種ボランティア活動やインターンシップ、地域イベントへの参加について全体へ呼びかけ、必要に応じて個別に声をかける。	①ボランティア、インターンシップ等校外での活動への参加状況 （少なくとも１回は参加した者）７年度：68.3% ６年度：66.9% ５年度：68.8% 評価基準：A＝70%以上 B＝65%以上 C＝65%未満	各種イベントへの参加者数110名（68.3%）となり、例年並みであった。イベントは盛り上がっているが、参加者が固定され、担任等だけでなく、学校全体としての働き掛けが必要である。	B
			②本校ホームページの「陵南ニュース」から新しい情報発信ができるように更新回数を増やす。	②「陵南ニュース」年間更新回数　７年度：２４回 ６年度：２回 ５年度：７回 評価基準：A＝10回以上 B＝5回以上 C＝4回以下	陵南ニュースの更新は、昨年度を大幅に超え今年度24回に上った。記事数が30であるので、タイムリーな情報提供が１年を通じてできた。	A

令 和 7 年 度　学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標	○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。

重点目標	分掌等	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況、来年度へ向けて	評定
4 教職員の連携・働き方 （チームづくり）	学校経営	・業務を1人で抱え込まず、複数人で取り組む体制づくりを進める。 ・スクラップビルドの視点を持った業務改善、効率化を進める。 ・確実な情報共有を進め、教員間の連携意識を高める。	日々の業務の中での報告・連絡・相談を効率的に行うために、運営委員会や年団主任会などを活用する。 各課、各年団の業務内容の中で削減や効率化できるものがないか問いかけるとともに、所属の枠を超えて発信できるようにする。	学校評価アンケート　《協働体制づくりが進んでいる》 教員 ７年度：　91% ６年度：　83% ５年度：　92% 評価基準：Ａ＝85%以上 Ｂ＝75%以上 Ｃ＝75%未満	既存の会議や委員会等を活用することで新たな負担を強いることなく学校運営ができた。また、職員の交流の場を設けることを支援するなど、職員間のコミュニケーションが取りやすい雰囲気を多少ではあるが醸成できた。学校評価アンケートの該当項目は91%となり、当初の目標を達成できたといえる。次年度は、今年度の雰囲気を保ちつつ、具体的に業務削減がどれくらいできるかが重要である。	A